

これがわたしの
旦那さま 2


市尾彩佳
Saika Ichio



RB

レジーナ文庫





登場人物
紹介

ケヴィン▲

シングルドの従兄で、
第一の側近。
シュエラの後見人を
務める。

▲ヘリオット

シングルドの近衛
時代の仲間
で第二の側近。
お調子者だが
実は策士。

▲マントノン夫人

シュエラ付きの女官。
シュエラや侍女を厳しく
教育する頼もしい女性。

ラダム公爵▲

王国の三公爵の一人。
王妃の伯父で
自分の孫を王太子に
しようと目論む。

エミリア▲

シングルドの王妃。王城内の者から
「悲劇の王妃」と呼ばれているが……

シングルド▲

23歳。ラウシュリッツ王国国王。
異母兄が亡くなったため
突然国王に。国王としての
プレッシャーに日々苦しんでいる。

シュエラ▲

18歳。貧乏伯爵家の長女。
国王の側近であるケヴィンに
誘われ愛妾おしよ候補として
王城に上がることに。

目次

おまけ	“本当の愛妾”への道のり	351
番外編	夢でもどこでも	305
	悲劇の女王	112
	シユエラのおねだり	8
	これがわたしの旦那さま2	7

これがわたしの旦那さま 2

シユエラのおねだり

1 「こんなことがありました」

愛妾あいじょうとなったシユエラのために、マントノン夫人が女官として招かれてから五日。その日の午前、ブリュール子爵ししやくと名乗る男性がシユエラに面会を求めた。取り立てて断る理由もなかったため応接室に通すと、小太りの中年の男性がにやけ顔で入ってきて、テーブルに着いているシユエラの前でうやうやしく礼をとる。「わたくしごときにシユエラ様ご拝謁はいてつの榮譽を賜り、恐悦至極きょうえつしごくに存じます。噂うわさに違ちがわぬシユエラ様の誠に麗しきお姿、感動の極みです。つややかに波打つ栗色の髪、雲の白さも映しこむやわらかき光をたたえた空色の瞳……その美しさにふさわしい最上の品をお

持ちいたしました。お近づきのしるしに、どうぞお収めください」

そう言うて男性は、腕かみに抱えていた彩色はんどの施された木の箱をテーブルの上に置き、ふたを開けた。

その細長い箱の中には、やわらかそうな白い布が敷き詰められ、ピンで首飾りが固定されている。首飾りの中央には親指の先ほどもある真つ赤な寶石が輝き、その周りには小さくて透明な石がはめこまれている。台は見事な金色。太めの鎖の色も金色。

「最高級ルビーをダイヤモンドで囲んだ首飾りでございます。鎖には質の高い金が使われています」

わたしの瞳の色じゃ、この赤と金色に負けてしまいそうだわ……

そう考えながらシユエラは箱の中身と子爵を交互に見て、それから言った。

「わたくしにくださるといふことですか？」

「はい。その通りにございます」

少し考えて、背後に立つマントノンを振り返る。

「どうしたらいいでしょうか？」

「女官殿にお聞きになられずとも、遠慮などなさらずお受け取りいただいでいいのですよ」

親切そうに子爵は口を挟んでくる。シユエラは困った顔を彼に向けた。

「こんなに高価なものをいただいても、わたくしにはお返しできるものがありません」
子爵はヘラヘラ笑いながら胸の前で小さく手を振る。

「シユエラ様から何かをいただこうなんてとんでもない。ただ、ご挨拶に参ったまでです」

「ですが、こういったものは便宜を図ってもらいたいことがあるから贈るのでしょうか？
ですがわたくしにはそういった力はありません」

子爵は一瞬息を呑んだが、すぐに取り繕い笑顔で片手を振った。

「いえいえ。そのようなお気遣いは無用です。ただ、わたくしがシユエラ様にご挨拶に伺ったと陛下にお伝えいただければ、というだけで……」

シユエラは小さくため息をついた。

「そういうことでしたら、やはりわたくしの一存で受け取ることはできません。マントノン夫人、こういった場合、わたくしはどうしたらいいのでしょうか？」

シユエラは再びマントノンを見上げる。白髪のままじつ髪をきっちりまとめ上げ、黒の女官服を隙なく着こんだ彼女は、相変わらずの無表情で淡々と答えた。

「わたくしにもわかりかねます。ケヴィン様にご相談なさつたらいかがでしょうか？」

「そうね……そうするわ。お待たせしてもよろしいかしら？ それとも後日、改めてお越しになりますか？」

シユエラは子爵のほうへ顔を向けながら声をかける。

が、その時にはすでに子爵は扉の前まで下がっていた。箱もふたを閉じて、入室した時と同じように腕に抱えこんでいる。

子爵はひきつった笑顔をシユエラのほうに向けたまま、器用に扉を開けた。

「い、いえ……結構でございます。その、お手間を取らせては申し訳ありませんので、出直してまいります」

ぺこりと頭を下げると、扉の陰に引っこんでしまう。扉はゆつくりと動き、ぱたんと音を立てて閉じた。

「結構でございます……？」

シユエラは扉のほうを指さして、マントノンに聞いた。

「あれは、どういう意味かしら？」

「贈り物を取り下げるという意味かと存じます」

背筋を伸ばし、お腹の前で手を組んだマントノンは、先ほどと変わらずました様子で答える。そのとたん、けたたましい笑い声が響いた。

「きゃーははははは！」
鮮やかな赤い巻き毛に、茶色のぼつちりとした目をした小柄な侍女がのけぞって笑っている。

「カチュアッ」

そのカチュアを、薄茶色の髪に薄い青色の目をしたフィーナが叱る。だが彼女もまた、何故か笑いをこらえて変な顔をしていた。

この二人は、三週間程前に始まった四人の侍女たちの職務放棄の最中、ちゃんと仕事をしてくれていた食事係の侍女で、今はマントノン夫人の計らいでシユエラ付きの侍女に昇格した少女たちだ。

そしてこの場には新しくシユエラ付きの侍女になったもう二人、クリフォード公爵の遠縁にあたるカレンとマチルダがいる。カレンがシユエラと同じ年の十八歳で、マチルダは一つ年下の十七歳。

この二人も、姿勢は崩さないけれど、何故か口元を歪めて体を震わせていた。

2 シユエラの報告

その日、シグルドが午後の休憩の時間にシユエラのもとを訪れると、シユエラは困惑した様子で午前中にあつたことを報告してきた。

ブリュール子爵と名乗る人物が、贈り物を持って訪ねてきたという。

シユエラの食事に菓を盛られたことから始まった、侍女の冤罪などの一連の問題が解決してまだ一週間だ。マントノンをシユエラ付きの女官として迎え入れ、職務放棄した侍女たちを入れ替えて、ようやく以前の穏やかで愉快な午後のひとときを取り戻せばいい。かりだというのに。

今度はシユエラを利用して出世をもくろむ輩が現れたか……

予測はしていたが、こうも早く現れるとは。どうやら貴族どもはシグルドをゆつくりさせてくれるつもりがないらしい。

神妙な面持ちでシユエラの話に耳を傾けていたが、話が進むにつれシグルドの我慢は利かなくなってくる。

「……マントノン夫人に怒られてカチュアも笑うのを止めたのですけど、何がおかしかったのでしょうか？ ……陛下？」

シユエラは不思議そうに首を傾げた。

笑ってはいけないと思いつつも、シグルドの口の端はひくつき、肩は揺れてしまう。そんなシグルドを見て、シユエラはむくれた様子で鼻の頭にしわを寄せた。

「ですから、何がそんなにおかしいのですか？」

とうとう声を上げて笑ってしまった。

「はははっ！ これほど愉快な撃退法は初めて聞いた！ そのような対応をされては媚びの売りようがないな」

「どういうことですか？」

シユエラはますます首をひねる。

「ああいう輩には正攻法が一番効くのだな。余も参考にさせてもらうことにしよう」

シグルドが腹を抱えて笑い出すと、シユエラは困り果てたようにうつむいた。

「わたくしには、何が何だかわかりません」

シグルドは口元にこぶしを当てて笑いを収めると、背後に立つ男をちらりと振り返り、軽く手を上げ指示をする。

「ヘリオット、シユエラに説明を」

ヘリオットはシグルドの側近の一人で、子爵家の三男だ。シグルドが近衛隊士であった頃からの付き合いで、戦場における作戦面で数々の功績を挙げたことを理由に側近として取りたてた。

薄茶色のくせのある髪に、軟派な——よく言えば人好きのする顔をした彼は、シグルドの言葉に意外そうな表情をした。

「何でわたしを名指しするんですか？」

「おまえの説明なら面白そうだからだ」

「そういうことですか」

納得したヘリオットは、シグルドにも見える所に移動して頭を下げた。

「ではご期待にお応えして演じさせていただきます。」

『すてきな首飾り！ もらってしまっているの？』

『もちろんですとも！ 国王陛下とご一緒の折にはぜひこの首飾りをお着けください。そしてぜひともわたくしの名前を陛下に……』

『まあ。たったそれだけのことでこんな高価なものを……』

『いえいえ。ご寵姫様のお口添えがあれば、陛下も何かの折にわたくしを取りたててく

ださるはず。そうしましたらわたたくしの出世の道が開けます。そのあかつきには、さらに高価な品をご用意できるかと存じます」

『これ以上に高価なものを？ ではそなたのこと、陛下によく伝えておきますわ』

『はっ！ ありがたきしあわせ』

——とまあ、このような話運びをしたかったというのに、今回の相手はあてが外れてしまったというわけです」

立ち位置、声音を変えつつ演技をするものだから、滑稽な話がさらに滑稽になる。

「期待を裏切らないな」

シグルドがくつくつ笑いながらヘリオットをほめると、赤い巻き毛の侍女が笑いながら盛大な拍手を送った。

「ヘリオット様、最高です！」

「カチュアちゃん、ありがと」

ヘリオットは調子に乗って投げキッスを送る。カチュアは頬を手で押さえて「きゃー」と悲鳴を上げた。他の侍女たちも姿勢を保てず、口元を押さえてそっぽを向いたり腹を押さえて震えていたりする。

それを見たマントノンが注意しようとするのを、シグルドは軽く手を上げて止めた。

「今は勘弁してやれ」

ヘリオットに面白さを要求したのは自分だ。なのに、笑うなど言ってはかわいそうだろう。それに侍女たちがこのメンバーになってから、場の雰囲気（まぎ）が和やかになった。以前、必要最低限しかシユエラと接しなかった者たちと違い、紅茶の入れ替えや菓子の取り分けなどこまめに用事を聞き、返事をするシユエラも以前よりずっとやわらかな表情を見せるようになった。嬉しいの場なのだから仕える者たちにも多少羽目を外すことを許してもいいと思うのに、マントノンはつんとすましてきっぱりと言う。

「笑うにしても、上品な笑い方というものがごじます」

機嫌が悪いわけでも、ましてや国王であるシグルドを軽視してのことでもない。彼女はいつもこんな調子で、滅多なことでは表情も姿勢も崩さない。

マントノンはシグルドの背後に控えるもう一人の側近のケヴィンに向かって、淡々と告げた。

「ケヴィン様、失礼ながらカレンとマチルダも教育がまだ済んでいない様子。この二人もわたくしが教育してもよろしいでしょうか？」

「願ってもないことです。よろしくお願ひします」

本当にありがたいのか何なのかよくわからない口調でケヴィンは答える。

下級貴族の子女は、行儀見習いのために縁のある上級貴族の家に仕えることが多い。ケヴィンが連れてきたのだから彼女たちもそうした教育を受けてきたと思うが、マントノンからすればまだまだ不十分なものがあるのだろう。

ケヴィンの返答を聞いて、赤みがかった黒色の髪のカレンという侍女と少し癖のあるブルネットの髪をしたマチルダという侍女は、慌てて姿勢を正してかしまる。それを見て噴き出したカチュアに、マントノンはすかさず言った。

「一番教育が必要なのはあなたです。カチュア」

カチュアは「げ」と言いたげに顔をひきつらせる。

話が途切れたところで、シユエラが遠慮がちに口を開いた。

「陛下、あの」

腑に落ちないといった様子で問いかけてくる。

「そういったことがあるのは存じておりますけど、何故それをわたくしに期待するのかわからないのです。わたくしのような者が、陛下に意見を申し上げていいはずがありませんのに……」

わからないと言ったのはそつちのほうか。説明しにくい部分に疑問を持ったものだ。

シグルドは困って、眉間にしわを寄せる。

ここラウシユリツツ王国では、国政の場に女性の姿はない。王女は王位を継ぐことはなく、その時々々の国王に一番血の近い男性が王位を継承することになる。貴族の爵位も、娘はいても息子がいなければ娘婿に継がせるか、親戚から男子を養子にもらって後継とするのが通例だった。

そうした国であるから、女性が表だって発言することは好ましいとは思われず、妻や娘は黙って夫や父親に従い、家を守るのが美德とされている。……これは貴族に限ったことで、平民はそうでもないのだが。

しかし例外というものはどこにもある。女性に弱い男は、母親や妻の言いなりになってその意見を国政にまで上げてくるし、そうした極端な話は別にすることも男ならたいてい好きな女性の言うことは聞いてやりたいと思うものだ。

シユエラの口ぶりからしてここまでのことは理解しているようだが、それに自分が当てはまるとは思っていない。

愛妾とは国王に愛される者のこと。シグルドがシユエラを愛しているわけではなくとも、愛妾としたからには、人々はそのように見て彼女のシグルドへの影響力に期待する。そのことをシユエラはわかっていないようだ。

これをシグルド自身が説明するのは難しい。本当にシユエラを愛しているのなら、「余

がそなたを愛しているからだ」とでも言えばいいのだから……

シグルドが思案していると、カレンが代わりに口を開いた。

「あら。そんなことございませぬわ、シユエラ様。長年愛妾を持つことを拒まれていた陛下がようやくお迎えになったご寵姫様ですもの。シユエラ様のお声に陛下がお耳を貸さないとすることはございませぬわ」

きっぱり言い切るカレンにシグルドは頭が痛くなった。もう少し歯に衣着せるということができないものか。〃寵姫〃という言葉を除けば間違つてはいないから、反論することもできない。

侍女たちが「そうよね」とうなずき合っているのに、シユエラはまだ理解できないといった顔をしている。シユエラが侍女になりたいと言った時に気付いたのだが、彼女がシグルドに何をもちたのか、シユエラ自身はまったくわかってないらしい。

初めてのお茶会の時シユエラは、シグルドが紅茶を一杯飲み干すわずかな間に、彼が疲れていることに気付き、はちみつを濃い紅茶で溶かしその中に大量のレモン汁を加えた、いわゆる〃風邪薬〃を飲ませた。疲労をためこんでいるシグルドは、体は何ともなくとも心が風邪をひいている状態だったのだという。平民の風邪の特効薬が王城で贅沢な食事をとっているシグルドに効くかどうかはものの試しだったようだが、そうした彼

女の労りが彼の心身を癒し、かつての自分を取り戻させてくれた。

国王になつてから、いや、前国王が戦死した時から、シグルドの両肩には重責がかかっていた。国王の死に混乱する軍を立て直し、王都に取って返して即位。そして多くの貴族たちの反対意見を浴びながら、隣国の戦乱からの撤退を強行した。

生母が愛妾であり、この国の貴族の中で最も下位にあたる男爵の娘であったことから、シグルドはほとんどの貴族たちから王家の人間として扱われていなかった。王太子の死によって王位継承権が裸り上がっただけの者が当たり前のような顔をして即位し、その一存で軍を引き上げたのだから、大方の貴族にとつては面白くなかつただろう。シグルドが即位した当時二十歳という若さであったことも、悔りを助長する原因となった。指示を出してもなかなか動き出さず、問い質せばわけのわからない言い訳に時間をつぶされた。

その他にも問題とされたのが、シグルドの国王としての知識と経験の不足だった。

王位継承権を与えられながら存在を軽んじられてきたシグルドには、国王のそばで学ぶ機会などありはしなかった。シグルドの後見となり幼少の頃から邸で面倒を見てくれたクリフォード公爵は、シグルドにさまざまなことを学ばせたが、国王になつてみればそれだけでは追いつかないほどに、ありとあらゆるものが要求された。

ただでさえ軽んじられているのに、これ以上侮ら（あなご）れてはならない。そう強く思い、毎日理解できなくとも理解したふりをして貴族たちの話を必死に聞いた。そのようにしてシグルドは自分を追い詰め、己を見失（おのれ）つていったのだと思う。ケヴィンたちの忠告を聞いていたつもりが聞いておらず、ままならない状況に腹を立て、周囲の者に当たり散らして。

シユエラは愛妾候補として城に上がりながら国王に相手にされないという理不尽な状況を、怒るわけでも嘆くわけでもなく、シグルドのために心を砕いてくれた。

シグルドがああ紅茶に絶大な効果を見出さなければ、あれきりシユエラに会いには行かなかつただろう。それを承知の上で、シユエラはシグルドを茶の席から早々に解放した。自身を愛妾候補として城に上げたケヴィンに逆らつてまで。そんな彼女の優しさに、シグルドの頑な（かたく）だつた心は溶かされ、知らず狭めてしまつていた視野は一気に広がった。見えるものが増えれば増えるほど、困難な状況を解決する糸口は見つかりやすくなる。

シグルドがそうやって救われたことに、シユエラは気付いているだろうか？ ……話してはいないから、気付いていないのかもしれない。

「陛下がわたくしの話聞いてくださるとしても、わたくしごときが政治に口を挟んでいいということにはならないわ」

盛り上がる侍女たちをたしなめるように言ったシユエラに、ケヴィンが冷やかな声で告げる。

「その点についてわきまえていただけで、非常に助かります。今後同じようなことがありましたら、わたしに相談することにしてください」

ケヴィンはシグルドの側近であり、クリフォード公爵の後継（あとつぎ）であり、前国王の姉を母に持つ、シグルドの従兄（いとこ）でもある。シグルドの執務の補佐が職務であるが、現状シグルドは彼の指導を受けながら執務をこなしている状況であり、さしずめケヴィンは教育係といったところだ。父親に似て長身で、黒髪を左右になでつけきつちりと固めている。その几帳面（きょうめん）な様子に加え、表情も乏しいため、今の言葉も冷淡な印象を受けるが、シユエラに悪感情を持つているわけではない。もう少しやわらかな物言いもできるはずなのに、シユエラに対してはそうする必要がないと感じているのだろう。

自分が連れてきた娘なんだから、もう少し愛想よくしたらいいのに……

シユエラは、ケヴィンが所領に住まいを移したハーネット伯爵のもとにわざわざ出向いて王城まで連れてきた娘だ。表向きの後見は父親であるクリフォード公爵であるが、実質的な後見は自身が務めている。候補であった頃は多少世話をしていたようだが、愛妾になったとたん自分の役目は終わったとばかりにつき離しているように思う。家族か

ら遠く引き離れた責任をとって王都での家族代わりになるくらいはしてもいいと思うのに、ケヴィンはそうは思わないらしい。

ケヴィンの薄情さに内心あきれながら、シグルドもシユエラに言った。

「そうしてくれ。ケヴィンのカタブツは有名だから、よっぽどの相手でない限り引っこむ」
 愛妾あいしやうになったからには避けられないことかもしれないが、シユエラをできる限り貴族の争いに巻きこみたくない。

愛妾という立場は、悪意にさらされることが多い。

この国は一夫一妻制で、国王に限って慣例として認められているとはいえ、愛人と同様の存在である愛妾を蔑む傾向がある。それでいて人は国王の寵ちゆうを得たことに對し、嫉妬と羨望を向ける。何より正妻である王妃は、夫たる国王に愛妾を持たれるのを屈辱に思うのが普通だ。自分に伴侶はんりやとして不足があるとみなされたも同然だからだ。

シグルドの生母は、前国王の戯れで寵を得てシグルドを産んだ。実家の身分が低く後ろ盾をあてにできなかった十六歳の少女は、前国王の庇護ひごもろくに受けられぬまま、貴族たちの思惑や気位の高かった前国王の王妃の嫉妬にさらされ、シグルドを産んで三年でこの世を去った。

シグルドの王妃が嫉妬からシユエラに害を成すとは思えないが、王妃の周囲の者たち

はシユエラいまいまの存在を忌々しく思っていることだろう。他の貴族たちの中にも、クリフオード公爵の後見を得て城に上がったシユエラを煙たく思う者がきつといる。

直接危害を加えられずとも、悪意のある言動に触れることがあれば心が傷つく。シユエラが王城に上がってたった二カ月なのに、その短い間にずいぶんと苦勞をさせてしまった。その詫わびも兼ねて、これからはちゃんと守ってやりたい。

ふと、守るならもつといい方法があると気付き、シグルドは口を開いた。

「いや、そうするまでもないな。そなたは貴族たちの面会を受けずともよい。マントノン夫人」

「はい」

「シユエラへの面会を取り次がないようにしてくれ。どうぞどの時もこいつもろくな用事ではないだろうからな。どうしてもシユエラに会いたいと言う者には、余かケヴィンの許可を取るよう伝えよ」

「かしこまりました」

シユエラから少し離れたところに立つマントノンは相変わず無表情だが、どこか満足した様子でシグルドに答える。

ヘリオットが、いつの間にかにやにやししながらシグルドを見下ろしていた。今のやり

とりにからかいのネタでも見つけたのだろう。軽くにらみつけてやると肩をすくめ、シユエラに視線を移してにこやかに言う。

「それにしてもシユエラ様は無欲ですね。豪華な首飾りをくれると言われて、欲しいと思われなかったのですか?」

シユエラは小さく首を傾げた。

「そうですね……換金して実家に送ってもよいのでしたら欲しかったのですけど……」

その返答に、ケヴィンとマントノンをのぞく全員が笑う。

シグルドも肩を揺すり、声を上げて笑った。

「そなたは相変わらずそなただな!」

マントノンがシユエラ付きの女官としてやってきてから、シユエラが茶の席で内職の道具を広げることはなくなったが、今でも彼女は実家に金を入れたらしい。

シユエラの実家は貧乏なのだという。ケヴィンが援助をしていると聞かすが、それだけでは足りないのかもしれない。

先日もシユエラからこのような話を聞いた。

一人の侍女の実家が商売をしていて、シユエラや彼女の家族が作ったレースのハンカチをそこに卸す話を進めていたのだそう。その際に侍女が「愛妾様が作られたレース

のハンカチだと宣伝すれば、通常の値段よりもっと高く売れます。平民は貴族ほど愛妾つて存在に抵抗があるわけじゃないですし、高貴な人が作った物だと知れば物珍しさが手伝つて、高くても飛ぶように売れますよ」と言つて、マントノンに「シユエラ様の品格が落ちるような真似はやめなさい」とこっぴどく叱られたのだとか。

貴族が平民のように内職をしていると知られれば、人々、特に貴族たちから、貴族としてふさわしくないと非難と中傷を浴びることになる。貴族にとつて平民のようにあくせく働くことは品位を落とす行為であり、自分だけでなく他の貴族が行っているのも許さないものなのだ。

シグルド自身はシユエラが内職するのを気にしたりはしないのだが、貴族たちがとかかく言うことを考えると、あえて公言するような行為は控えさせた。

シユエラを守るために請じたマントノンにさっそく助けられた。彼女がいなければどうなっていたことやら。シユエラは貴族としての立ち居振る舞いは身につけているのに、たまにこうして貴族の常識から外れることがある。シユエラを守るためにも、彼女自身が危険を呼びこまないよう、しっかり教育してもらったほうがいいだろう。

「シユエラ様。高貴な女性がお金の話などなさらないでくださいませ」

わずかに眉をひそめて言うマントノンに、シユエラは申し訳なさそうに小さくなった。

「すみません……」

「立場が下の者に謝る必要ありません。ただ、わかったとおっしゃればいいのです」

「あ、すみま——わかりました」

反射的に謝りかけたシユエラはすぐに言い直す。教育は着々と進められているようだ。シグルドは勉強で苦労したから、こうした場面を見るとつい同情的な気分になる。

「あまり厳しくしないでやってくれ。シユエラの作法はだいたいできている。公の場に出ることもあるまいし、少しくらい羽目を外しても問題ないだろう」

すると思わぬ反論が返ってきた。

「公の場にお出にならなくとも、公の方といつお会いになるかわかりません。そうした時に隙を見せれば、それが悪い噂となつて飛び交うこともありうるのです。わたくしはシユエラ様をお守りするとお誓いいたしましたので、きちんと教育させていたただきたいです」

「わ……わかった」

マントノンがこのように強気に出るのは、前国王の愛妾だったシグルドの母のことがあるからだ。

シグルドの生母ラベンナの女官を務めていたマントノンは、ラベンナを守り切れず死なせてしまったことを二十年経った今でも悔いていた。そのためシユエラの女官になる

ことを拒んできたのだが、シグルドの熱意に再び女官となることを承諾し、今度こそ愛妾を守りぬくと決意を固めている。

シグルドもシユエラを守るべくさまざまなことを考えてはいるが、マントノンのこの使命感には頭が下がる思いがする。

「わ……わかった」

シグルドはさすがごと引き下がった。

周囲の笑いひとつくにおさまり、話が途切れて沈黙が流れる。

この微妙な雰囲気は何とかしようと考えたのだろう。マチルダが焦ったように、ほんとう手を叩いて言った。

「そうですね！ シユエラ様は陛下に何かおねだりなさいませぬの？」

それにカレンが調子を合わせる。

「陛下は国一番のお方ですもの。豪華なドレスだって美しい宝石だって、何でも取りよせてくださいますわ」

場の雰囲気をよくするのも侍女のつとめ。侍女たちはことさらにはしゃぐ様子で、場を盛り上げようとする。ヘリオットもカレンのあとに続いた。

「それはいいですね。男性は女性にかわいくおねだりされるとうれしくなるものですか

ら。陛下を喜ばせると思つてぜひそうなさってください」
 何も口に含んでいないのに、シグルドはむせかえりそうになる。それは「好きな」女性に限つての話だろう。シユエラには友情という好意を抱いているが、そのように頼られて喜ぶような間柄ではない。

だが、たまには欲しいものはないかと聞いてやらねばならない。シユエラは実家が貧しく身の回りのものはほとんどケヴィンに与えられているため、控えめな彼女の性格上遠慮して言い出せないことも多いはずだ。

「ヘリオットの言うことには耳を貸さなくていいが、欲しいものがあれば何なりと言うがいい」

シユエラのことだから何もないと断つてくるかもしれない。あるいは内職の材料のよくな他愛のないものを欲しがるか。

しかしシユエラはためらうように視線を泳がせ、それからおそろおそろといった様子でシグルドのほうをうかがつてきた。

「……本当に何でもよろしいのですか？」

それを見て、シグルドの心臓が大きく跳ねる。

シグルドは内心驚いた。予想外の返事に意表を突かれたということもあるが、それだ

けとは思えない不可解な動悸に。

そんな自分自身に戸惑いながら、シグルドはそれを隠すように笑みを浮かべる。

「もちろんだ。歴代の愛妾たちは値の張る宝飾品ばかりではなく、地位さえも望んだというぞ。それに比べてそなたは欲がなさすぎる。実家に金を送りたいのなら、余にねだるうとは思わないのか？」

「実家のほうはケヴィン様から援助をいただいているので大丈夫です。ですが何でも叶えてくださるといふのなら一つお願いがあるのです」

シグルドの言葉に安心したのか、シユエラは顔をほころばせて胸元で小さく手を合わせた。

執務室に戻ると、ヘリオットが早速声をかけてきた。

「よかったですね。おねだりしてもらえて」

からかう気満々な様子にシグルドはげんなりし、無言で自分の席に座る。

「それにしても思い切りましたねー。ドレス一着よりよっぽど費用がかさむんじゃないですか？」

返す言葉もない。シグルド自身もびっくりだ。あの、あの、あの、自分を言い出すなん

て。さすがにシユエラも固辞したが、シグルドは強引に決めてしまった。自分でもどうかしていたとしか思えない。

席についてさつそく書状をしたため始めていたケヴィンが、時間を惜しむように手元から視線を外さず口を開いた。

「金銭については問題ありません。問題なのはいかに安全を確保するかです。万全を期すつもりですが、ひとたび何かが起これば、せっかくの機会が台無しになります。本当によろしいのですか？ 今から取り消されても、シユエラ様は怒ったりなさらないと思いますか？」

シグルドもそう思う。しかしがっかりはするだろう。

先ほどの侍女やヘリオットの言葉と意図するところは違うが、シユエラの願いはできるだけ叶えてやりたい。シユエラは滅多に自分から何かを望んだりしないから、こうしたひとつひとつの機会を逃さないようにしなければ、いつまでたっても恩に報いることはできないと思うのだ。

「一度約束したからには、必ず叶える。金はいくらかかってもいい。安全を最優先に準備を整えてくれ」

「かしこまりました」

ケヴィンは一度顔を上げて答えると、すぐに書状に向き直る。シユエラの願いを叶えるためにも、例のところへの連絡は早いほうがいい。

ケヴィンとの話が終わったところで、ヘリオットがにこやかに話しかけてきた。

「いやーそれにしても、シユエラ様に贈り物をしようとする貴族がこんなに早く現れるとは。あ、でも当然の成り行きですか。冤罪事件解決後、シユエラ様の存在は城内でも日増しに大きくなっていますから」

「……やけに含みのある言い方だな。何が言いたいんだ？」
うさんくさげに見上げると、ヘリオットはにやつと笑う。

「陛下もわかっただけじゃありませんか？ シユエラ様の『魔法の紅茶』のおかげで陛下の執務ははかどるようになりましたし、絶対愛妾は持たないと思われていた陛下が愛妾を迎えられたことは、貴族たちの間に大きな波紋を呼んでいます。何より、シユエラ様のために陛下が謝罪したことで、陛下の評判だけでなくシユエラ様の評判も上がっているんですよ」

「シユエラの評判？」

「ええ。国王としてマズいのではと心配していましたが、謝罪に値する行為を行ったことを批判する者は意外に少なく、謝罪をして相応に償った誠実さに好印象を持った者

が圧倒的に多いんです。誰のために陛下が謝罪したのか、みんな知ってますからね。シユエラ様は陛下を惑わす悪女ではなく、陛下の寵愛を受けるにふさわしい、よくできた女性なのではないかという噂も広まっています」

シユエラの評判が上がるのは喜ばしいことだ。

だが、誰のために陛下が謝罪したのか、みんな知ってますからね？ それではまるでいや、その通りなのだ、色々と誤解されるのではないだろうか。……誤解されてもいいのか。シユエラがシグルドに愛されていると勘違いすれば、シユエラが存在を排除したいと考える者たちもシグルドの逆鱗に触れるのを恐れて、そうやすやすと危害を加えられないはずだ。

しかし噂を黙認して、シグルドがシユエラを愛していると誤解され続けるというのはも……

額を押さえて思い悩んでいたシグルドは、ちらっと視線を上げた。ヘリオットがにやにやと笑っている。それを見て思わずため息をこぼした。

ヘリオットにはそういう意味でシユエラを愛妾にしたのではないと説明してもいいのだが、世継ぎを待ち望むケヴィンにまたうるさく言われそうだし、ヘリオットの様子からしてそんな風に否定しても聞く耳を持たない気がする。

それだけでなく、先ほどの含みのある言葉から察するに。

「……ヘリオット。おまえ、もしかしてそういう噂を意図的に流しているんじゃないのか？」

ヘリオットは悪びれた様子もなくへらっと笑った。

「あ、バレました？」

やっぱりこいつか、噂を流しているのは……

「バレました？ じゃないだろう。わざとらしい」

額を押さえていた手を降ろして眉をひそめると、ヘリオットは表情を引き締めて話し出した。

「ですが積極的に流さなきゃ、噂なんてなかなか広まらないですよ。せつかく陛下とシユエラ様の好感度を上げられるチャンスです。今までラダム公爵の流す噂にさんざん煮え湯を飲まされてきましたからね。わたしはこの機を逃すつもりはありません」

ヘリオットの浮かべた笑顔が、だんだん黒いものに変わっていく。普段ひょうひょうとしていて何を考えているのかわからないことが多いが、噂の件については相当腹にすえかねていたらしい。

その気持ちはシグルドも同じだ。シグルド自身が噂の被害者なのだから。

シグルドが王子時代に王族として扱われていなかったのは、生母の身分が低かったからだけではない。

シグルドの生母が亡くなったあと、前国王の王妃はシグルドを殺そうとした。この王妃は他国の王女で、気位の高さから夫である前国王が愛妾あめじょうを持つのがよほど許せなかったようだ。その憎しみは愛妾の死後、息子であるシグルドに向けられた。王妃は当時三歳だったシグルドを、事故に見せかけて二階のバルコニーから突き落としたのだ。その時は落ちた場所が生け垣の上だったこともあり軽症で済んだが、王妃が自分に過失はないと言い張れば罰することはできない。

シグルドの警護にあたっていた者から報告を受けたクリフォード公爵は、このままにしておけば王妃は再びシグルドに害を成すだろう」と国王を説き伏せ、まだ幼い王子を自分の邸やしきに引き取った。そのことに腹を立てた王妃は、親族であるラダム公爵と結託けつたくして、「王城外で育つ王子は王族とは言えない」と触れて回った。王子は王城で暮らし、国王のそばにいて政治を学んで国王を補佐すべきであり、貴族のもとで暮らしながら形ばかりの帝王学を学んだところで王族としてふさわしい知識は身につけられないのだ。他国の後ろ盾かたかぶを持つ王妃と国を支える三公爵の一人がそのように言えば、貴族たちはそういうものだとして扱うしかない。父である国王ですら二人をとがめることはできず、

そうしてシグルドは王太子に次ぐ王位継承権を持ちながら、その存在を軽んじられてきた。

通常であったなら、十歳になり、近衛隊こゑたいの見習い隊士になる資格を得てすぐに入隊した第二王子は、兄王太子を支えようとしているのだと好意的に見られることもあっただろう。しかしシグルドの入隊は、ラダム公爵の進言により強制的に行われたものだったため、見直されるどころか、当時近衛隊で幅を利かせていたラダム派の近衛隊士たちから不当なしごきを受けることになった。

そのラダム派の隊士たちと確執たつげつのあった、子爵家男爵家ししやくかだにじやくといった下級貴族出身の隊士たちの仲間になったことで、不当な扱いからは解放されたが、数年後、今度は隣国の戦乱に王国軍の総指揮官として赴くおもむよう国王から命じられる。

これもラダム公爵と当時の王妃の策略だ。隣国から亡命してきた王族の一人の要請を受け、隣国の内乱を収めるという名目で軍を送ったものの、ラウシュリッツ王国軍は思うような戦果を上げられずにいた。それを王族が軍を率いておらず士気が上がらないからだとして、ラダム公爵は近衛隊内で武術の腕を上げていた当時十五歳のシグルドを推薦した。理屈は通っていたため、クリフォード公爵も有効な反論をすることができず、議会にてシグルドの王国軍総指揮官就任は可決された。

王族とは言えないと触れ回っておきながら、都合のいい時だけ王族扱いをする。この理不尽にどれだけ苦渋をなめたことか。

シグルドは国王の命令によって戦場に赴いた。そしてある程度進軍を果たしたところで帰国し、手に入れた地の守りを固めるべきと進言した。だがラダム公爵は、シグルドの言葉を「シグルド様にはこれ以上の進軍は荷が勝ちすぎるようだ」と言い換えて、議会で国王の遠征を可決させる。また、その後も強硬に反対を続けた一派を、国王の命令に逆らったとして王城から追い出した。

そうして王都を追われたうちの一人が、シユエラの父親であるハーネット伯爵だ。

ラダム公爵の策略の犠牲になったのは、シグルドだけではない。シユエラの父親も、シユエラ自身も、ラダム公爵が強引に戦争を推し進めなければ王都を追われることにはならなかったし、前国王も戦場に行かず死ぬことはなかった。

それほどのことをしてかしておきながら、三公爵の一人という地位と、多くの支持者にかばわれて、罪は自らにあらざると言わんばかりに未だ王城内にのさばっている。

ラダム公爵を国政の場から追い出し、罪を償わせたい。しかし、これまで評価を貶められてきたシグルドに、貴族たちをまとめあげ、ラダム公爵を糾弾できるだけの力はまだない。

だがヘリオットは、その機が巡ってきたと判断したのでだろう。意気揚々と説明を始める。

「今、協力者を内々にのつて意図的に噂を広めています。側近として陛下にお仕えするようにしてから、何とかしたいとずっと思っていたんですよ。不当な噂を信じた奴らに陛下の足を引っ張られるのは腹立たしいですからね。対抗できそうなネタを常日頃探してはいたんですが、なかなかこれといったものが見つからず困ってました。貴族たちの協力を得られずに難航することもありました。陛下は即位してからずっと国の立て直しに尽力し、少しずつ成果を上げてきました。これは評価されてもいいはずのものですよ」

評価されているはず——そんな風に思っていてくれたのか。

努力を認められるのはうれしいことだ。いつもふざけているヘリオットが真面目に語るからなおのこと。思わず頬がゆるんでくるが、続く言葉にシグルドの表情は引き締まる。「ですが貴族たちはその苦勞を察することもせず、国王ならば当然だと思ってますからね。けれどシユエラ様という逸材を手に入れた今、反撃に出ない手はありません。陛下の評価は上がってきましたし、それを陰で支えたシユエラ様も、愛妾と言えど悪女」という城の者たちの固定観念をくつがえしつつあります。陛下が冤罪事件を皆が納得する形で解決したという事実は、ラダム公爵といえども消すことはできないでしょう。この

機にラダムが流してきた噂を退け、陛下の求心力を高めるんです」

噂によって削られる力があるのなら、逆に噂によって相手の力を削ぎ、同時にこちらが力をつけることができるというのはわかる。だがしかし……

「おまえの言っていることはわかるが、そのためにシユエラを利用するというのは……」
シユエラのためにもなるとはいえ、利用するのは気が引ける。

ためらい、口ごもるシグルドに、ヘリオットは苦笑した。

「シユエラ様なら理解してくださいるでしょう。聞けば、シユエラ様は隣国の戦乱から撤退を決めた陛下に感謝し、お助けしたい一心で王城に上がったのだとか。むしろ積極的に協力してくださいるんじゃないですか？」

「何故その話を知ってる!？」

シグルドは驚き、執務机に手をつけて立ち上がる。

それはシユエラが薬を盛られて倒れた夜、寝室で自分だけに語られた話のはずだ。

まさか、聞かれていたのか——？

寝室にまで聞き耳を立てているのかと怒る寸前、ヘリオットはあつさりと答える。

「ケヴィンから聞いたんです」

シグルドがすぐさまケヴィンを見ると、ケヴィンは書面から顔を上げ淡々と言った。

「王城に上がることをお勧めするため実家に伺った際、シユエラ様からそのようにお聞きしました」

「——そうか」

激昂しかけた自分に羞恥を覚えながら、シグルドは椅子に座り直す。

あの話は、秘密というわけでもなかったのだな。

よく考えてみれば、隠す必要なんかどこにもない。そのはずなのに、シグルドだけが知っていると思っていた話をこの二人が語ったことを、何だか面白くないと感じていた。

3 シユエラとダンス

シグルドの腕の中でシユエラが身じろぎする。

「あの……これはどうして必要なのですか？」

「嫌か？」

顔をのぞきこんで視線を合わせようとしてみるが、シユエラは目元をほんのりと染め、居心地悪そうに視線をそらす。

「いえ……。ですが、落ち着かなくて……」

「ゆっくりでいいから慣れていけ。そなたが慣れてくれなければ先に進めない」

覆いかぶさるように視線の先に回りこめば、懸命に頸を引いて逃れようとする。だがシグルドが肩に腕を回しているから、シユエラはそれ以上逃げられない。

「お、お顔が近いです……」

必死に目を合わせまいとする様子に、ふと意地悪を試みたくなくて、からかい混じりに言っただけだ。

「顔を近づけなければ口づけもできないではないか」

シユエラはかーっと真っ赤になりうつむく。顔が近付き、二人の前髪が重なった。

黙りこんでしまったシユエラに、シグルドはちょっと不機嫌なふりをして言った。

「余と口づけるのは嫌か？」

シユエラは慌てて顔を上げたが、至近距離のシグルドに驚いてすぐにまたうつむいてしまう。

「めっそもありません！　けど、何だか恐れ多くて……」

その言葉に思わず苦笑がもれる。

「そのようなことを言っているうちはまだまだだな。今日はここまででしよう」

シユエラの肩に回していた腕をほどいて、シグルドはソファを立った。

ここはシユエラの寝室だ。部屋の隅にソファが置かれていて、就寝前のひとときをそこで過ごすことが最近の日課となっている。

シユエラにガウンを預け、ベッドに入りながらシグルドはこっそりため息をついた。恐れ多い、か。

シユエラは言いたいことがあるが誰に対してもはつきりとものを言うが、だからといって身分をおろそかにしているわけではない。シグルドを国王として敬い、気安く言葉を交わしているようでいて、けれどどこかで一線を引いているふしがある。

その距離の取り方が以前は心地よかったのだが、最近は時折寂しさを感じる。シグルドはシユエラとより親しくありたいと思っているのに、シユエラはそうでもないのかと。シユエラはもともと、国王の役に立つことだけを望んで愛妾になる決心をした娘だ。

貴族らしくない言動をすることはあっても、その精神は生粋の貴族だ。

貴族は国を支えるために存在し、国を守り、国王に忠誠を捧げて仕える。過去には国のために自らの命を犠牲にする覚悟も要求された時代があったという。建国当初の、まだ周辺諸国と国境をめぐって戦いに明け暮れていた、国の体制も整っていなかった時代のことだが。

シユエラの精神は、その古き時代に通ずるものがあるように思う。

それは、派閥内、血族間で連綿と受け継がれてきたものなのかもしれない。シユエラの父ハーネット伯爵はペレス公爵の派閥に属し、自身も彼の遠縁にあたる。三公爵の一人であるペレス公爵は、五年前、国王の遠征をめぐってラダム公爵と対立し、議会で敗れてもなお国王に思いとどまるよう進言し続けたことから、領地での謹慎、すなわち国政から退くことを命じられた。自らを顧みず進言し続けたペレス公爵は、真に国を思う本物の貴族だとシグルドは思う。

その立場が危うくなるうとも進言をやめなかったペレス公爵と、愛妾という立場がどのようなものか理解しながら王城に上がったシユエラ。

その犠牲の精神は尊く、また実直すぎるとも言える。

ペレス公爵のような者こそ王城に留まってほしかった。国のためを思うのならラダム公爵に抗する勢力として国政の場に残ってほしかったのに、小細工することをよしとせず、真つ向から立ち向かったがために謹慎の憂き目に遭った。その上、シグルドに力がないばかりに王都に戻るよう命を下してやれず、今もなお謹慎の身にある。

シユエラはシユエラで、『隣国から軍を引き上げてくださった国王陛下』の役に立つことしか考えていないらしく、シグルドに対して要求していいはずの報酬も、愛妾なら

ば普通望むはずの国王からの愛情も欲しがらない。

——いや、愛情を欲しがられても困るのだが。

ベッドのそばに置いてある椅子の背もたれに、シユエラは縦に丁寧に折ったシグルドのガウンをかけた。それから自分もガウンを脱ぎ、きれいにたたんで座面に置くと、ベッドの右側にいるシグルドの反対側から入るために、大きなベッドの足もとのほうを回る。横にならずシユエラがベッドに入るのを待っていたシグルドは、薄い夜着一枚で歩くシユエラを直視することができず、わずかに目をそらした。

シユエラも夜着姿を見られるのが恥ずかしいのだろう。そそくさとベッドに入って、さりげなく毛布を胸元まで引き上げる。

「そ、それではおやすみなさいませ」

「ああ。おやすみ」

挨拶を交わしお互いベッドに横になると、寝室はとたん静まり返った。

息をするのものはわかるようなシユエラの緊張が伝わってくる。

シグルドが寝たふりをしてゆっくりと呼吸を繰り返していると、次第にシユエラからの緊張の気配が薄れてゆく。

シユエラの穏やかな寢息が聞こえ始めてしばらくしてから、シグルドはむっくりと体を起こし、額に手を当ててうなだれた。

「……眠れん」

シユエラを起こさないよう、口の中で小さくつぶやく。

あの日以来、ずっとこうだった。

シユエラを本当の愛妾わいしよとして扱うことに決めた、あの日から。

——わたくしは愛妾としての役目を果たしておりません。ならば愛妾としておそばに
いる必要などないではありませんか。

役目を果たしていないことに不安をつのらせていたらしいシユエラにそう訴えられ、どのくらいの覚悟があるのか確かめてみた。恋愛経験がないというのは本当だったらしく、ベッドの上で覆いかぶさっただけで硬直し、窒息してしまいうるさなありさだった。

緊張をほぐすだけでも一苦労だなど思っていたら、本当に骨の折れる仕事となった。

何しろ、シグルドとソファに並んで座るだけでもかちこちになる。

候補だった頃には大胆にも膝枕をしてみせたくせに。……いや、シユエラにとつてあの時と今とでは訳が違うのだろう。あの時は部屋着とはいえ衣服をしっかりと身につけていたし、シグルドのことを弟たちと同じように考えていた。

今は夜着の上にガウンをまとっているだけの心許ない恰好かっこうである上に、シユエラもようやくシグルドが弟たちのような子どもではないことを理解してくれている。

だが、こんなに緊張されてしまうくらいなら、以前のほうがまだ触れやすかったかもしれない。

初心者だから仕方あるまい。慣れていこうと努力している様子もうかがえるし、彼女のペースに合わせてゆっくり進めていこうと考えている。

だがシグルドは、問題を抱えこんでしまった。

シユエラの横でまったく眠れない。

彼女のことはよき友人だと思っている。なのに夜の、常とは違うシユエラに動悸どうきを覚える。眠る直前に見る薄手の夜着姿に落ち着かなくなり、隣に横たわる身体に触れてみたくなる。

シユエラは自分のことを女性としての魅力に乏しいと思っているようだが、とんでもない。容姿こそは十人並みより少し見栄えがする程度だが、気付いてしまえば体つきは実に魅惑的だった。豊かな胸と腰、細くくびれた胴、四肢はほっそりとしなやかだ。

気付かなければ眠れぬ夜を過ごすこともなかったのに。

あれがいけなかった。

覚悟を見ようとわざと抱き上げた時、思わぬ軽さに驚いた。胸が大きかったから、もう少し太っていると思っていた。抱え上げた足は細く、背中の厚みも頼りなげだった。怯えさせているとわかっていたのに、これくらいはいいだろうと頬にそっと口づけた。あの時のなめらかでやわらかい感触が、一週間経った今でも唇に残る。

悪戯心で顔をのぞきこんでも、気を抜けば、さらに顔を近付けてしまいそうになる。シユエラのためにゆっくり進もうとしていることを忘れて。

執務室で書類に目を通してしていると、ケヴィンに声をかけられた。

「眠れていないのですか？ 陛下」

何度目かのあくびを見かねてのことだろう。面談の最中は眠気も少しさめるのだが、書類を読んでいただけだとどうしても気が抜けてしまう。

口を覆ってあくびをかみ殺していると、ケヴィンの机から書類を運んできたヘリオットがにやにや笑いながら言った。

「最近夜のうちに私室に戻られるのに、どうしてなんでしょうね？」

同じベッドで寝る努力をしていれば、そのうち気の迷いも晴れるだろう。そう考え毎晩シユエラの隣に横になるのだが、目が冴えてしまつて眠れない。翌日の政務のことを

考え仕方なく私室に戻るものの、戻ってもシユエラのことか頭にちらついて結局寝不足に陥っている。

ヘリオットはこうしたことまで見透かしているようで、しゃくに障る。それでこれからかわれた仕返しも込めて言つてやった。

「やけにからんでくるが、ヘリオット、おまえ今恋人いないんだろ。たまつてるんじゃないのか？」

凶星だったらしい。ヘリオットの笑顔が凍つたのを見て、してやったりとほくそ笑む。「おまえには余と違つて監視がないから、適当に遊んでおけ。体に毒だぞ」

好き放題言つたら多少目が冴えた。書類に再び目を落とす。

「陛下も言うようになりましたねえ……」

硬直の解けたヘリオットは後頭部をかき、シグルドが署名した書類を自分の机に持つていった。

細々とした雑務を一手に引き受けるヘリオットは、執務に必要な資料や情報を集めたり、執務室を訪れる者たちの面談の予定を組んだり事前にその内容をまとめたりと、大量の仕事を効率よく回している。

三年前王位に就き、政務に携わるようになって以来日に日に増え続けた書類は、一月

ほど前から急激に減っていった。以前はなかなか片付かず後日に繰り延べられていたものが、最近では提出されたその日のうちに片付くことが多い。

今日など、茶の時間の前だというのに、手元に残っているのはあと二枚だった。

「ここ最近、書類の量が少なすぎやしないか？」

減るにしても極端すぎる。疑問を口にする、書類から顔を上げてケヴィンは答えた。「陛下の裁可さぶかが速くなったので、さまざま案件が迅速じゆんそくに片付いて陳情書ちんじやうしょが減ったのです。陛下の執務能力が今より上がればさらに仕事は減りますし、処理速度が向上すれば執務時間も短縮されます」

シグルドはためいき混じりに言う。

「ケヴィン。おまえ、それはほめているのか？ 説教しているのか？」

ケヴィンの言うことはどうも説教くさくていけない。そういうつもりで言ったのに、真面目に返された。

「ほめておりますし、より一層お励みいただきたいとも思っております。時間に余裕が出てくれば、剣の鍛錬たねんに励んでいただいてもけっこうですし、シユエラ様とお過ごしになる時間を増やしていただくこともできます」

「……っ！」

息を呑んで思わず顔をひきつらせば、ヘリオットが目ざとく気付き、含み笑いを投げかけてくる。シグルドは害虫をかみつぶした顔をして、彼からさりげなく視線をそらした。

ヘリオットはからかう気満々で話しかけてくるからあしらうこともできるが、ケヴィンは無意識にそういった内容を会話に混ぜてくるので、思わぬところで驚かされて困る。

シグルドとヘリオットの無言のやりとりで気付かなかったケヴィンが、シグルドの手元に視線を落としながら言った。

「陛下、お手持ちの書類はもう片付けられたのですか？」

「ああ。あと少しだ」

「休憩の時間までにまだ時間がございますので、わたしの手元の書類を一部お渡しいたします。お読みになって許可するか不許可とするかをお考えください」

ケヴィンは「わたしの手元の」と言ったが、それは本来ならばシグルドが一人で見べき書類だ。今までシグルドの処理が追い付かず、ケヴィンが先に目を通して許可すべきでない判断したものは回してこなかったが、ようやく許可不許可の判断を一部シグルドに任せることにしたらしい。

ケヴィンはシグルドを傀儡かいらいにはしたくないと言った。ケヴィンはシグルドの執務能力

の不足を補うため、仕方なく彼のすべき仕事を肩替わりしているに過ぎないのだ。
 シュエラのおねだりのおかげで視野が広がり、落ちついて貴族たちの話を聞くことができ、思っていたよりシグルドは国王として認められてなかったわけではないとわかった。未だラダム派の噂を真に受けたり、あるいはシグルドが若いことを理由にして高飛車に出る者もないではなかったが、以前よりはスムーズに話が運ぶようになり、面談の必要も少なくなった。

それでもまだ、国王として不足している部分はたくさんある。

貴族たちからの信頼の厚かった前国王や、その国王をよく補佐し次期国王として期待の高かった兄王太子には、未だに遠く及ばない。

焦る気持ちは今もあるが、以前のように周りが見えなくなってしまいうようなことはない。不足している部分は一つずつ埋めていくしかないし、今なら理解している。

シグルドは手元の書類を片付け、ヘリオットがケヴィンのところから運んできた新たな書類に目を落とした。

「……何だ？ この王城に出仕する際に着用する衣服の代金も報酬に上乘せしてほしい」とは？」

「一部の貴族たちが言い出していることですね。身だしなみを整えて出仕するのも務め

の内。ならばそのための費用も報酬に含めるべきだと」

ケヴィンが即答した内容に、シグルドは思わず眉間にしわを寄せる。

「……その者たちは衣服も整えられないほど困窮しているのか？」

「いいえ。むしろ競い合って豪華な衣裳を作らせ、そのために邸の維持もままならないと聞きます」

その返答にシグルドは眉間のしわをさらに深めた。

「ある程度身だしなみを整えるのはいい心がけだが、過度に走るのならば問題外だな。

そいつらの道楽に割く予算などない。何なら侍従のお仕着せを支給してやってもよいと伝えておけ」

シグルドが思い付きを口にする、自分の机に並べた書類を整理していたヘリオットが振り返って言う。

「あ、それ名案ですね。みんな同じなら競いようがありませんから」

ヘリオットの軽口に対し、ケヴィンは生真面目に答えた。

「そういう冗談の通じる相手ではありません。馬鹿馬鹿しい要求をしていることにも気付かない連中ですから。適当に理由をつけて却下し、あとはできるだけ関わらないほうがよろしいかと存じます」

「確かに。相手にするだけで疲れそうだ。……このような案件までここに上がってくるのか？」

「半数近くがそういった要望書ですね。ですがそうした中に重要な要望が含まれていることもありますので、おろそかに扱うわけにはいきません」

つまりは、どんなにくだらないうい要望書であっても、一度は目を通さなければならぬということか。

シグルドはげんなりしつつ今読んだ書類を脇によけ、次の書類に目を通し始めた。

時間になったので執務に一区切りつけ、シユエラの居室に向かう。

ノックをして中に入れば、シユエラが笑顔で出迎えてくれた。

「いらつしゃいませ」

部屋の中央、テーブルのそばでドレスをつまみ優雅に礼をしてくる。

礼の姿勢だけは、初めて会った時から完璧だった。が、体を起こす際の動きが今日はどうもかきこちない。

シグルドは席に着きながら尋ねた。

「どうかしたのか？」

「え？ 何がでございますか？」

心当たりがない様子で、不思議そうに首を傾げる。

「礼の時の動作が少しきこちなかった。体をどこか痛めているのか？」
言われて気付いたらしく、納得したようにうなずいた。

「ええ。今日は午前中にダンスのレッスンがありました、久しぶりに踊ったものですか
ら少し体が痛くなってしまったのです。お昼をはさみましたのでずいぶんと楽になった
のですが……」

シユエラが申し訳なきように語尾をにごしたのを見て、シグルドは慌てて付け加えた。
「きこちなかったといっても、注意して見なければわからなかった程度だ。気にするこ
とはない」

「ありがとうございます」

ほっとしたように表情をゆるめ、シユエラも席に座る。

「久しぶりと言うが、どのくらいの間だ？」

「十三歳以来ですから、五年ほどになります」

「十三からといえば、背丈もずいぶんと伸びて随分勝手も違っただろう。よし、余が相手してやる。テーブルを隅に」

首を回して言いかけ、口をつぐむ。そしてすまなく思いながらシユエラを見た。
「そなたは体を痛めていたのだったな」

シユエラは気にしないでというように、微笑ほほえんで首を横に振った。

「陛下がお相手くださるのでしたら、ぜひお願いしたいです」

「それではテーブルを隅に寄せましょう」

マントノン夫人が言うと、侍女たちはさっそくテーブルの上の菓子や花を片付け始める。

動きまわる侍女たちをよけながら、マントノン夫人はシグルドに近付いた。

「豎琴たてこしらでよろしければ音をお出しいたしますが、いかがいたしましたでしょうか」

「頼む」

マントノンは一礼して寝室に引っこみ、豎琴を持って戻ってくる。

女性の手で一抱かかえするくらい大きさのものだ。瓶びんの輪郭を縁取ったような形の木枠に、立てて置くための台座がついている。装飾彫りが施ほどこされ磨かれてはいるが、彩色も金銀宝石のはめこみもない、木枠に弦を張ってあるだけの簡素なものだった。マントノンの私物なのだろう。シユエラに楽器を教えると言っていたが、このことかもしれない。
「座らせていただきます」

窓際に夜番の侍女が座る椅子を置き、窓を背にマントノンが座る。

「速度はゆっくりで頼む」

「かしこまりました」

踊れるほどのスペースを空けた部屋の中央に立ち、シグルドはシユエラに手を差し伸べた。

シユエラは少しためらうように右手を胸元に置いていたが、遠慮がちにその手を重ねてくる。シグルドはそれを軽く握り、ゆっくりと引き寄せた。導かれるままにシユエラは歩を進め、シグルドの目の前に立つ。

夜にはこれだけ近寄れば緊張に固まっていた体が、今はシグルドが導くのに従ってしなやかに動く。

何の抵抗もなく腕の中に収まったシユエラに対し、シグルドの胸は不意に高鳴った。

見上げて微笑ほほえみかけてくる彼女を直視できなくて、思わず顔をそむけてしまいそうになる。

その時、ぼろんと豎琴がかき鳴らされた。シグルドは我に返り、シユエラの背に手を回してダンスの体勢をとる。

「それでは演奏させていただきます」

一拍置いてから、マントノンは曲を奏で始めた。

十本の弦で鳴らすのは、舞踏会でよく聴く楽曲だった。本来はさまざまな楽器を合わせて演奏するものだが、メロディだけならば竖琴だけで十分だ。

前奏が終わったところで、シグルドは足を滑らせるようにステップを踏み始める。平静を装いながらも、内心ほっとしていた。マントノンが竖琴を鳴らすのがあと少しでも遅れたら、みっともなく動揺をあらわにしまったかもしれない。

ダンスに集中してしまえば、胸の高鳴りもすぐに収まった。

もともとスローテンポの曲をゆっくりに行っているせいかな、シユエラはきちんとステップを踏んでシグルドについてくる。

「上手いではないか」

久しぶりに踊って体を痛めたとは思えない。シユエラは顔を上げてにこっと笑った。

「陛下のリードがお上手なのでございます」

シグルドは目を細める。何故だかまぶしくて、まともに目を開けていられない。

と、ふと思う。

「午前中にダンスのレッスンがあったと言っていたが、練習相手は誰だったのだ？」

口にしてすぐ、馬鹿なことを聞いたと舌打ちしたくなった。が、シグルドの後悔に気

付いた様子もなく、シユエラはあっさりと答える。

「マントノン夫人です。何でもお出来になつてすばらしい方だと思いますわ」

「あ、ああ。そうだな」

「わたくしも、マントノン夫人のように何でもできるようになりたいです」

「いや。そなたは男性のステップまで覚える必要はない」

ステップを踏むとくるくる視線の先が変わる。部屋の隅に寄って見ているヘリオットや侍女たちの含みのある笑みを見て、シグルドは居たたまれなくなった。

一曲終わったところでシユエラから手を離す。

「よろしければ、またお相手してくださいませね」

「あ、ああ……」

にっこり笑うシユエラから、シグルドはさりげなく目をそらした。

テーブルが元に戻され、改めてお茶が用意される。

気もそぞろに雑談を交わし、茶を一杯飲み干したところで席を立った。一曲踊ったこともあって、時間的に早すぎるということはない。

夜にまた訪れるつもりならこのタイミングで告げるのだが、今日は何も言えなかった。少し距離を置いて頭を冷やしたい。さっきの質問は自分でもマズかったと思う。練習

相手を追及するなど、まるでやきもちではないか。

おかしい。シユエラに対して恋愛感情など持ち合わせていないはずなのに。

ふと思いつき出し、シグルドはドアノブに手をかけたところで振り返った。

「そうだ。あれはいつになった？」

シユエラは一瞬首を傾げ考えるそぶりを見せたが、すぐに思い当たったのか、ぱあつと顔を輝かせた。

「はい。一週間後の到着になるそうです。ありがとうございます」

満面の笑みに、シグルドは目がくらむような感覚を覚えた。

頭がぐらりと揺れかけたのを、扉のほうに向き直る動作で何とかごまかす。

「そ、そうか。よかったな」

かろうじてこれだけ言って、シグルドはそそくさとシユエラの部屋をあとにした。

これは本格的におかしい。

今晩は久しぶりに酒を飲んでとつと寝ようと考えながら、不可解な気持ちちを吹き飛ばそうと、いつになく早足で廊下を渡っていった。

4 家族との再会

——おまえの心が癒えるまで、俺は誰も愛さないと誓う。

シグルドが王妃エミリアにそう言ってから、もう三年が過ぎた。

エミリアは相変わらず北館に閉じこもっている。それだけ悲しみが深いのだろうが、環境も悪いに違いない。

エミリアのもとには連日ラダム公爵派の貴族たちが訪れていた。うわべのなくさめに、媚びへつらい。そんなものを並べたてる者たちに囲まれていては、エミリアの気が休まるはずもない。

一度は追い払うよう命令したが、ラダム公爵に抗議された。王妃を孤立させ、彼女の親戚縁者を王城から排除する魂胆かと。締め出そうという意図があつてのことではなかったが、ラダム派の他の貴族たちからも激しい抗議を受け、撤回するしかなかった。シグルド自身は政務に忙しく、その上エミリアを何よりも大事とする女官に阻まれて、会える機会は少なかった。けれどいつも心の片隅で彼女のことを案じていた。